

博士論文要旨

論文題名：予持概念を手掛かりとしたフッサール時間論の 包括的解明

立命館大学大学院文学研究科
人文学専攻博士課程後期課程

ヤナガワ コウヘイ
柳川 耕平

本研究は 20 世紀初頭の哲学者 E. フッサールの時間論を扱う。彼の時間論は時期ごとに異なる顔を見せており、これらの諸側面をそれぞれ特徴付けることが本研究の目的である。これを達成するために、本研究は予持 **Protention** という概念に着目する。予持とは、未来へ向かう志向とされており、これは過去へ向かう志向である把持 **Retention** と共に知覚において働いているとされている。この予持という志向は初期から後期に至るまで一貫してフッサールの時間論に登場しているが、その重要度も性格も、時期によって異なっている。この予持の変遷はフッサールの気紛れに依るものとは考えにくく、本研究はこの変遷がフッサール時間論の各時期の特徴をも反映していると考えて、各時期の予持概念の特徴づけを通してフッサール時間論の各時期の特徴づけを試みた。

第一部では、予持が最も詳細に論じられていた中期時間論のテキスト、『ベルナウ草稿』を扱う。この考察を通じ、中期の予持は、将来における予持それ自身、さらには把持を志向するとされている。他方の把持もかつての把持それ自体および予持を志向するとされており、ここには意識が意識それ自身を志向する（意識する）という、意識の自己意識的構造が確認できる。この自己意識的な予持・把持を用いて、フッサールは体験全体の未来・過去への無限の延び広がり、時間的な順序関係、未来・現在・過去という時間の様相性の成立を説明している。

第二部では、予持がまだあまり詳しく論じられていなかった初期時間論を扱う。この議論により、初期時間論の中でも 1907 年以前では将来の知覚与件を先取りするような予持が扱われ、1907 年以降では自己意識的予持（ただしこの予持は把持とは絡み合わない）が扱われていることが明らかとなる。これを手掛かりとして、1907 以前の初期時間論では時間的対象の構成が論じられ、1907 年以後の初期時間論では体験の統一が論じられていることが明らかとなった。また、与件志向的予持および時間的対象の構成は 1920 年代に入って再度論じ直されている。また、1907 年以降に扱われた問題は、1917 年の『ベルナウ草稿』の予持とも関係している。以上のことから、初期の問題は中期の問題とは異なっているが、中期時間論においても放棄されていないことが分かる。

第三部では予持があまり記述されなくなった後期時間論を扱う。この議論により、後期では中期までに記述されたものと同じ予持が記述されていること、また予持は主題的には論じられておらず、他の議論の予備考察に登場するのみであることが確認される。この事実を手掛かりとし、また後期時間論『C 草稿』の記述を解釈することで、後期時間論においても中期までの考察は放棄されていないこと、その一方で後期時間論では中期まで扱われていた問題よりも深い次元に属する原様相的現在・自我の問題が扱われていることが明らかとなった。

以上より本研究では、フッサール時間論の各時期では互いに異なる問題が扱われていること、それらは別の問題が主題的に扱われるようになった後も維持されていること、したがってどの時期の問題も、他の時期の問題によっては還元され得ないことを明らかにした。また、本研究は予持に着目したことにより、特に中期において記述されていた体験の時間的構造を明らかにすることができた。ただし、本研究が注目した予持という概念は、初期や後期においてはあまり詳しく記述されていなかったため、これらの時期についての解明は手薄になってしまった。この点は今後の課題としたい。